

に、関ヶ原の合戦は豊臣対徳川という対立の構図の戦いであったと思われる。そう思われないよう家康は氣を使ったのに噂は無責任である。だからといって、こうした噂を無視できない。福島正則をはじめ豊臣恩顧の武将たちは、家康が秀頼をないがしろにするようになれば、家康から離れかねない。戦いに勝利したからといって秀頼と距離をとるわけにはいかない。

「我が輝元の代わりに大坂城に入れば、ふたたび秀頼公の後ろ盾となると思われるが、どうだろうか」と家康は四郎次郎に聞いてみた。「そうなれば、茶々さまや秀頼公が殿を受け入れたと解釈するでしょうか、それがいちばんよいと思います」と彼は答えた。

家康は四郎次郎が帰ると井伊直政いいなおまさを呼んだ。姿を見せた直政に、家康は戦いで負った傷の具合を気にしてたずねた。

「たいしたことはありません。殿に薬を塗っていただいたお陰で、痛みもさほどではありません。いかようにも働くことができます」と直政は氣丈に答えた。傷が酷くなければ大事な使命を託したいという家康の気持ちが直政に伝わった。

「済まぬが大坂まで行ってほしい」と家康は切り出した。「黒田長政と福島正則に手紙を持たせて大坂城へ向かわせたが、その後どうなっているのか確かめてほしい。このまま輝元が大坂城に留まっていたのでは何のために戦ったのか分からなくなる」と家康は直政の目を見ながら言った。「輝元が大坂に居すわっているかぎり、戦いに決着がついたとは言えない。秀頼公をかつき、我らに対抗するという懸念は少しでも早く払拭しなくてはならぬ」

福島正則らが輝元と結託するはずはないと信じていても、過去には思っても見なかったことが起きていくから不安だったのだ。

「すぐに大坂へ行き確かめてまいります。輝元どのが大坂城から退去するよう働きかけます」と家康の意図を理解した直政が言った。

「輝元には所領を安堵すると伝えてほしい。戦いに出てこなかったといっても、敵の総大将だったのだから処罰されるのではないかと疑心暗鬼になっているかもしれない」

直政は家康が心配性であることを分かっている。そうした思いを共有してこそ家臣として信頼を勝ち得たのである。「向こうからは何も言っていないのですね」と直政は念を押した。吉川きつかわ広家ひろいえとは、黒田長政が連絡を取り合っているはずだ。それなら広家が、輝元が大坂城を出るよう促しても良いのではと思っただ。

「あるいは大坂へ行った長政たちと話しているかも知れぬ。首尾よく話が進展、輝元が言うことを聞けばよいが、そのあたりのことも含めて確かめてほしい。合戦後に長政のところに広家からの使者が来て、我に挨拶すべきところだが、引き揚げるのに手間取ったため伺えないから後日、大坂城で輝元ともども御礼申し上げるつもりであると伝えて欲しいという報告があった。しかし、広家に輝元を動かす力があるのか、そうでなかったら困るが」と家康は苦い顔をして語った。

「広家さまも、輝元さまとまだ連絡がとれていないのかもしれませんが、いずれにしても、状況を急ぎ確かめてまいります」と言って、直政は頭を下げ退出した。それでも家康は不安がおさまらず、翌日には本多忠勝ただかつまで大坂に派遣した。

次に大野治長おののちながが家康に呼ばれた。

第十四章 家康の征夷大將軍への就任

1

家康は一六〇一年（慶長六年）三月二十三日は大坂城西の丸から、修復なった伏見城の本丸へ移った。関ヶ原の合戦後に大坂城に入って半年後のことである。天守や多くの施設は改修中だったが、これ以上待つつもりはなかった。

新領地に入った大名たちはそれほどの混乱がなく支配地を統括しつつあり、大坂城の二の丸にいた息子の秀忠を引き連れて伏見城に入ったのは、けじめをつけるためだった。豊臣氏と関係なくまつりごとを取り仕切る意志を示したのである。

合戦後に家康が大坂城西の丸に入り、豊臣氏との関係は表面的にはうまくいっているように見えた。それだけに、家康が大坂城を出るといのは茶々には意外だった。秀頼の家老は片桐且元と小出秀政の二人となっていたが、小出秀政は老いと病であり頼りにはならない。小出秀政は六十歳、家康と歳はそれほど変わらないが、家康の旺盛な活動ぶりに比較すれば違いは歴然としていた。

西の丸を出るにあたり家康は「これからも何かと相談に乗るつもりだから安心してほしい」と茶々に言った。引越しの準備が進み、いままら引き止められない雰囲気、家康の挨拶に白々しい感じがある。それでも、茶々は「なんとか城に留まれないか」とたずねずにはいられなかった。

「この国のまつりごとを諸将と相談するには伏見城のほうが良いということをお分かってください」と家康は応じた。そこで茶々は、息子の秀頼と家康の孫娘のお千との婚約について触れた。家康が豊臣氏との縁まで切るつもりがないことを確認したかったのだ。家康は、秀吉が決めたことであるから、そのつもりでいると応じた。これからも関係を深めていくつもりだと家康は言うものの、豊臣氏と大坂城に対して、家康が距離をおくのかと思うと茶々は心細かった。とはいっても、どうすべきなのか知恵は浮かばない。これまでも周囲が面倒を見てくれたので、自分から状況を切り開いていく発想は持てなかった。このとき茶々は三十三歳だった。

茶々に信頼されている片桐且元も、家康が伏見城に移ると聞いて不安になった。なぜ大坂城を去るのか家康にたずねた。

「我がいると、危害を避けるために徳川の兵を城内におかねばならぬ。それでは周辺がものものしくなりすぎる。それに、我のところに来る要人や公家衆の警護まで考えると、我がこの城の主人であるかのようには振舞っていると思われてしまう。それは避けたい。我がいたのでは、秀頼さまも母上さまも気を使うであろう。だから我がいないほうが良い」と家康は答えた。

「家康さまに護られているから安心できるというもの。我らだけで秀頼さまを護るのは不安があります。そうした点のご配慮はいただけませんか」と且元は家康に問いかけた。

じである。勅使は大納言の広橋兼勝ひろはしかねかつがつとめ、朝廷内で将軍就任を決めた際の上卿、参議、奉行が儀式を取り仕切り、秀忠は正式に将軍に就任した。

秀忠は四月二十六日に将軍宣下を受けたお礼に参内した。昵懇衆が禁裏内で秀忠に従った。このときも三献の儀でもてなされた。進物は家康が就任したときと同じである。その後、京の二条城で将軍任官の祝いの宴をもよおした。関東や奥州の大名が列席して、家康のときを凌ぐ賑やかさだった。

秀忠の将軍就任は京で大きな話題になった。将軍という地位が世襲され、大坂城の豊臣家との関係がどうなるのか、京の住人たちのあいだでさまざまに取り沙汰された。徳川氏が豊臣氏の上に入ったと言う者がいるいっぽうで、秀頼が成人したときに関白職につくだろうから豊臣氏の権威は保たれていると言う者もいた。秀忠の将軍就任は天皇と徳川氏のあいだにしこりを残したという話をわけ知り顔に口にする者もいて、徳川氏よりも大坂城の豊臣氏と朝廷の関係は深まったという見方もあった。

この後は、家康が伏見にいるときに朝廷から正月の祝いのため勅使を派遣したが、家康がいなかったときに勅使は派遣されなくなった。これに対し、大坂城には毎年正月の祝いの勅使の派遣を欠かさなかった。その返礼に家老の片桐且元が参内し、茶々の配慮で天皇や公家衆への贈りものをしている。

8

徳川氏が征夷大将軍の地位を世襲したことは、大坂城にいる茶々を苛立たせた。

一六〇四年（慶長九年）の春に小西秀政が亡くなり、家老は片桐且元一人になっている。且元が摂津の

国奉行に任じられ国絵図と郷帳を作成するよう徳川氏から要請されたと聞き、茶々は豊臣氏に対して他の大名と同じく天下普請をさせるのではないかと不安になった。所領の石高を細かく登録する郷帳の提出は、秀吉が軍事動員するために作成を命じた御前帳と同じ内容なのだ。

茶々に言われて片桐且元は家康に問い合せた。これまで豊臣氏に労役が課されていないが、これからもそれは継続すると思っただけの良いのか念のために知らせて欲しいと伝えた。これまでは、家康により動員された人たちを指導する奉行の派遣を豊臣氏に対して要請していたから、豊臣氏も、徳川氏による天下普請を取り仕切る立場であった。それに比べて少人数の武士を江戸に派遣しているが、これからも同様でなくては豊臣氏の威信が傷つく。茶々は思っている。家老の片桐且元は、家康と茶々のあいだに挟まれて苦勞しなくてはならないが、家康との関係にしても、茶々は且元を頼りにする以外になかった。

さすがの家康も、天下普請を豊臣氏に指令するわけにはいかない。且元の問い合せには、これまでどおり扱おうという返事があり、茶々も胸をなでおろした。ところが、その後秀忠が将軍職を継ぐという報告がもたらされ、またしても茶々の不安が膨らんだのだ。家康が将軍になったときは、秀頼が成人するまで家康が武家の頭領になるのは仕方ないと思っただけで、徳川氏が将軍職を世襲すれば、武家の頭領はずっと徳川氏であると宣言したのと同じである。そうなる豊臣氏はどうなるのか。秀頼が成人して関白になれば朝廷の官職では上に立つとはいえず、武家の頭領にはなれなくなってしまう。

茶々は片桐且元を呼び、どう考えたら良いか聞いた。ところが、且元は自分の考えを述べようとしない。様子を見るより仕方ないと言うだけである。

そんなときに、天皇は秀忠の将軍職への就任は認めなければ、本当は不快に思っているという話が伝

した船だった。これで太平洋を無事に航海できるのか、嵐で船が沈没した経験があるビペロの不安は大きい。これなら新造したアダムスの船のほうがましではないかと考え、ビペロは家康がいる駿府の奉行に連絡し、アダムスのつくった船を見せてほしいと頼んだ。自分の目で確かめて安全なほうを選ぶつもりで、ビペロは家康の了解をとって江戸へ向かった。

この間に数か月が経過しており、江戸にやってきたビペロは、アダムス船を使用して別の計画が進んでいるのを知った。ビペロが通訳として連れてきた宣教師のソテロはビペロが乗らないというなら、アダムスのつくった船でメキシコに行くという別の計画を立てていたのだ。

ビペロの使いとして駿府にやってきたソテロは、宣教師でありながら野心的で策略を弄する人物だった。ビペロは豊後に行くにあたり、スペイン船が日本に立ち寄った際には食料の供給や乗組員の安全の保証などを認める協定を交わす交渉をソテロに託したのだ。その交渉が成立し協定を交わした。これでソテロの任務は終わったのだが、ビペロがアダムスの船を使用しないと聞いたソテロは、独自にアダムスのつくった船で日本人商人を乗せてメキシコに行く計画を立て、その実現に協力してほしいと家康に提案した。家康にとってもアダムスのつくった船が無駄にならないから歓迎すべき提案であり、そのための準備を進めていた。

江戸から浦賀に行き、アダムスのつくった船が老朽化したサンタアナ号より安全性が高いと判断したビペロは、改めて駿府の家康に連絡し、船を使わせてほしいと連絡した。ところが、ビペロはアダムスのつくった船は使わないと思っていたから、ビペロの要請は寝耳に水を感じだった。

ソテロが日本人を乗せてこの船でメキシコへ行くという話が進んでいると聞いたビペロのほうも、ソテ

ロには日本側との通商に関しての交渉を託しただけで、それとは別にメキシコに行く話を勝手に進めているとは思っても見なかった。そんな勝手は許さないとビペロは、本多正純に書状を送り、ソテロがメキシコに行くのを認めないでほしいと連絡した。自分が行くまでは、何の行動もとらないように念を押し、ビペロは駿府にやってきた。

ビペロの手紙を読んだ本多正純は、ソテロとビペロとは連携していると思っていたのに、ソテロの独断で進めていることを初めて知った。こうなると、メキシコでの権限を持つビペロの要望を叶え、ソテロの進めている話はないことにすべきであると進言し、家康もそれを認め、ソテロを退けた。

ビペロは翌一六一〇年（慶長十五年）五月にアダムス船でメキシコに向かった。ソテロの進めた商人をメキシコに行かせるという提案は一部採用するかたちで、京の商人、田中勝介たなかかつすけをはじめ二十人あまりの日本人がこの船でメキシコに行くことになった。うまくいけば新しい商路が開ける可能性がある。冒険心のある日本の商人たちは危険な船旅であるにもかかわらず期待を胸に太平洋に乗り出した。当時はまだ、日本人が太平洋を横断した経験はない。東南アジアへの航海でも遭難はつきもので、航海に出た船が遭難する可能性があるのは折り込み済みである。それよりはるかに危険がともなう太平洋横断は、ひと旗揚げようとする強者でなくては挑戦しなかつたろう。

ところが、家康の願いは届かなかつた。メキシコのスペイン提督は、日本を含むアジアにおける交易はマニラが取り仕切り、メキシコのスペイン人がこれに介入するのは好ましくないという裁定をくだした。メキシコとの交易を認めたのでは、マニラの地位が低下すると懸念したからである。ビペロは将来的には

第十七章 禁教令と大坂の陣の前夜まで

1

密通事件とその後の天皇譲位問題で、天皇のご機嫌がすこぶる悪いことが京の人々の関心を集めた。天皇と徳川氏との対立は抜き差しなくなっていると人々は囁き合った。

尊崇されている天皇のご機嫌を悪くした原因は徳川氏にあり、悪いのは家康であるという非難が隠されている。京を支える存在である天皇を、権力を笠に着てないがしろにしていると思われ、徳川氏の評判は地に落ちてしまいかねない。それを気にした茶屋四郎次郎が、所司代の板倉勝重を通じて何とかしたほうが良いと家康に伝えた。天皇が後継者である政仁親王と仲違いしたのも、もとはといえば家康が天皇の意向に逆らったからで、それが朝廷の混乱に輪をかけていると思われた。

天皇の怒りが静まらないままなのに徳川氏は知らん顔をしている。武家の頭領の將軍という地位も朝廷から授けられているのであり、朝廷との関係が悪化すれば、理由はどうあれ責任は徳川方にあると思われる。茶屋四郎次郎は家康になんとかすべきであると要請した。

理屈だけでは通らないようだ。譲りたくはなかったが、後陽成天皇が望むように譲位を認めるしか方法はないと家康も腹を括った。

譲位となれば、家康か秀忠が上洛しなくてはならない。秀忠は江戸の開発にかかわっている、この際は自分だけでいいだろうと判断した家康は、三月になったら上洛するつもりだと所司代の板倉勝重や朝廷の呢懇衆に伝えた。家康が京を離れたのは五年前の一六〇六年十月で、それ以来、京に足を向けていない。

家康の意思が伝えられると、朝廷でも慌ただしい動きが見られ、京の街でも人々がそわそわし始めた。譲位や即位式という滅多にない儀式に関心を示したのだ。先代の正親町天皇が譲位したのは一五八六年だから四半世紀も前の話である。そのときの儀式を参考にするにしても、秀吉と家康では朝廷との関係には違いがある。

譲位に関する打ち合わせのため家康の使者、大沢基宿おおさわもとよしは一六一一年（慶長十六年）一月十五日に上洛した。二日後に禁裏におもむき、家康からの献上品を納めた。後陽成天皇は眼病を理由に使者の大沢とは会わず、代わりに政仁親王が対応した。その席で大沢基宿は、家康が三月に上洛するつもりであることを伝えた。直後に江戸から正月の挨拶のため秀忠の使者が禁裏を訪れている。このときも政仁親王が対応した。家康は三月六日に駿府を出発した。九男の義直と十男の頼宣をとめない、五万もの武装集団を引き連れ、途中で築城中の名古屋城を見てまわり、三月十五日に京の二条城に入った。家康が武装集団とともに京に入ると街の雰囲気は一変した。権力の大きさを意識したせいか、徳川氏に対する批判の声は消えた。

武家伝奏の二人が家康のいる二条城を訪れ「御上洛、ありがとうございます」と挨拶した。家康が来なければ何も始まらない。家康は「式に臨むために参上したのでよろしく」と型どおりの挨拶で答えた。

になった。且元が大坂城内から撤去する際に京の所司代である板倉勝重に支援を求めたのに応え、勝重は且元が城内の屋敷から脱出するのに協力した。大坂方もそれを知ると攻撃を差し控えたから、大坂城の内部に詳しい片桐且元は徳川方の協力要請に応えざるを得なかったのである。

関ヶ原の合戦から十四年たち、加藤清正はすでにこの世におらず、福島正則もいまとなつては大坂方について家康と戦うわけにはいかない。それでも、家康からの軍事指令に従って大坂城を攻撃させるのは忍びないからと、福島正則、加藤嘉明、黒田長政に江戸留守役を命じた。代わりに、それぞれ後継者や家臣が指揮をとる。江戸にいる福島正則は、福島隊の指揮をとる息子の正勝に「存分に戦って徳川氏のために働くように」と激励した。

家康は一六一四年（慶長十九年）六月にオランダから最新鋭の大砲を購入していた。国産の大砲より飛距離が長い。堅固な城攻めには大砲が役に立つはずだ。駿府においていたものを大坂に運ぶよう命じた。

大坂城には戦いの経験がある真田信繁、長宗我部盛親、後藤基次、仙石英範、明石全登、毛利勝永など、かつての大名や武将たちが入った。秀頼の家臣の多くは戦いの経験がないから、彼ら浪人組に対する期待は大きい。彼らは必ずしも徳川氏に反発する者ばかりではないが、いずれも関ヶ原の合戦以来、活躍の場を失い起死回生を図ろうと徳川氏に挑む道を選んだ強者たちである。

真田信繁は人質として秀吉のところにいた経験があり、茶々とは面識がある。関ヶ原の合戦では兄の真田信之とは敵味方になり父とともに西軍で戦い、その後、蟄居させられているところを誘われ大坂城に入った。兄の信之は徳川方で参陣するから、またしても敵と味方に分かれた。土佐の大名だった長宗我部

盛親は浪人となり糊口をしのぐのに苦勞し、かつて仕えた者たちを糾合して大坂城に入った。筑前で黒田長政の重臣として勇猛果敢な武将として知られた後藤基次は、主君の黒田長政と対立して、やはり浪人としていた。宇喜多秀家の家臣だった明石全登はキリシタンの迫害から逃れ、豊臣の世になれば禁教令はなくなるかと期待して大坂城に入った。戦国の世で浪人となっている者、キリシタンとなり棄教せずに日本に留まった者たちが吸い寄せられるように大坂城に入った。

大坂城の近くの住民たちも二手に分かれた。戦いとなれば大坂城の周辺は混乱や危険が予想される。大坂方につく人たちは、身の安全をはかるために大坂城に避難した。いっぽう、徳川方につく人たちは、徳川氏に所属する兵士集団の移動に際し道案内をしたり、周囲の状況や過去の戦いの経緯など情報をもたらした。

多くの浪人や住人を入れて大坂城内は人で膨れ上がった。戦いに備えて兵糧を集めることが急務である。戦いが長期に及ぶ可能性があるから、膨大な量の食料を確保しなくてはならない。それを見越した近隣の商人が暗躍し、たちまち米価は高騰した。それでも食料を確保しなくてはならないと大坂方は食料確保に奔走した。金銀に糸目をつけていられない。こうした慌ただしい動きが、よけいに緊迫感を煽っている。城内では、片桐且元を弾劾した大野治長や織田頼長が主導権を握っていた。だが、かつての且元のように城内の意見をまとめきれいでなかった。大きな戦さを指導した経験はなく、良い知恵があるわけではない。それでも、浪人たちのペースで戦いに臨むわけにはいかない。且元の追放を主導した大野治長も、徳川方との決戦が不可避になってからは、さすがに強気に終始していられなくなった。本当は怖じ気づいていたのだが、行きがかり上、強気の姿勢を崩すわけにはいかなかった。各地の大名に味方につくよう呼

ばれ、この後も権力を握り諸大名の上に君臨する。將軍の代替わりに合わせて改元が進められ、翌一六二四年二月に「元和」から「寛永」と元号が変わる。

京における一連の行事を終えた秀忠は、禁裏に新たに一万石の御料を提供した。それまでは一万石だったから天皇家は倍増する所領を獲得した。秀忠が天皇と和子に配慮したものだ。この年の十一月に和子は皇女を出産した。

女御の和子は、この年に天皇の正室ともいふべき中宮ちゅうぐうになった。女御というのは側室と違い、中宮に準じるが、中宮はその上の身分である。しばらく前から皇后という名称が使用されずに中宮と別称されており、中宮は皇后と同じと考えられる。

和子を中宮にするよう入内したときから準備が進められており、ようやく念願がかなった。後水尾天皇の父の後陽成天皇に嫁いだ近衛前子は女御になっていたが、それ以前の天皇は側室しか持たない時代が続いた。女御というのは南北朝以来中絶していた身分の復活であるが、徳川氏から嫁いできた和子が中宮になったのは、徳川氏を大切にするという朝廷側の意思表示である。朝廷内における和子の地位は一段と高まり、天皇には何人もの側室がいて、彼女たちとのあいだに多くの親王や内親王が誕生するが、天皇が和子をないがしろにすることはなかった。

十一月に禁裏では中宮ちゅうぐう立の儀式が挙行された。幕府からもこれを祝う使節が秀忠と家光から派遣され、祝いの金品が届けられた。この後は幕府の財政的支援が増え、和子の気配りで公家たちとの関係もさらに改善された。

將軍となった家光の権威を高めるための行事として、この二年後に天皇は二条城へ行幸した。

家康が將軍になってから生まれた家光は、戦争を知らない世代である。大名たちを武力で従わせた経験はない。行幸は、家光の代に將軍の権威が揺るがないようにするための秀忠の配慮である。天皇を臣下の屋敷（城）に迎える行幸は、特別な行事として幕府の権威を高めるためだから周到な準備をし、二条城は改修された。建物は豪華絢爛を旨とし、力を入れたのは庭園である。美しさや調和が求められ、天候や季節の変化を計算し、目に映る光景が優雅に広がるようにする。庭づくりに才能を発揮した小堀正一（遠州）が指揮して造園し、庭中に茶屋が設置された。天皇をもてなす部屋はふんだんに金を使用して飾り、食事の際の器も金箔に彩られたものである。

天皇は幕府からの二条城への行幸の要請に喜んで応じた。將軍にふさわしい権威を見せつけ、大名たちを従えた賑々しい行列で、家光は禁裏まで来て天皇を出迎えた。家光は先に二条城に入り、天皇は関白以下の公家衆を従え、禁裏から鳳輦ほうねんに乗って二条城に到着した。京では滅多にない派手やかな行列であるから、京中が沸き立つようなお祭り騒ぎになった。九月六日から饗宴は六日間くり広げられた。このときの模様は『寛永行幸記』という絵入りの書物となり、京の住人たちのあいだで評判を呼んだ。

二条城へ行幸したときには中宮の和子は懐妊していた。入内して六年目のことで、この後に生まれたのが高仁親王たかねのみことである。祖父となる秀忠も禁裏も喜びに包まれた。和子が懐妊するようにという祈祷が続けられ、三人目にしてようやく皇子の誕生をみた。

翌一六二七年（寛永四年）四月、武家伝奏が江戸へ行き、二年後に譲位したいという天皇の意向を秀忠に伝えた。皇子が誕生したので従来からの願いを叶える機会が訪れたと判断したのだ。幼帝が即位した例は過去にあるから無理な願いではない。学問に打ち込み、良い和歌をつくるために研鑽したい。そして、